

人々の笑顔があふれる「地域づくり」を応援する

地域づくり in ほくりく



写真 和田 日朗

「イチョウの輝く時」

秋も深まったビッグスワン。
柔らかな秋の光を受けて黄金色に輝くイチョウの木。
沢山の人が散歩を楽しみにここを訪れます。

2022 AUTUMN

- 随 想 ②
富山の土徳を伝える
林口 砂里((一社)富山県西部観光社 水と匠 プロデューサー)
- 特別企画 ④
開園からまもなく四半世紀
越後丘陵公園・その魅力と役割
笹岡 和幸(国営越後丘陵公園事務所長)
- 北陸再発見 ⑧
クラフトジン 新しいツーリズム拠点
(新潟県上越市)

- 特集「地域とともに」
令和元年台風19号千曲川水害
デジタルアーカイブ構築・利活用事業 ⑩
(信州大学 教育学部 廣内研究室 内山 琴絵)
地域にのこる川除絵図・河川図を防災・減災に活用を..... ⑭
(歴史的水害史料活用研究会)
- 北陸地方防災エキスパート 出動報告 ⑰
- シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」 ⑱
おらほの足を守る -JR只見線・全線運転再開-
(福島県金山町)
- 伝言板 ⑳

富山の土徳を伝える



はやしぐち さり
林口 砂里

一般社団法人富山県西部観光社 水と匠 プロデューサー
株式会社水と匠 代表取締役

富山県高岡市出身。東京外国語大学中国語学科卒業。東京デザインセンター、P3 art and environment 等での勤務を経て、2005年にエピファニーワークスを立ち上げ、アートプロジェクトやコンサートの企画・プロデュースなどを行う。2012年、拠点を高岡市に移し、地域のものづくり・まちづくり振興プロジェクトに取り組む。

■ふるさとへの想い

「話題の映画やコンサートが来ない、オシャレな服がすぐには買えない田舎なんて大嫌い、早く都会に出たい」と思っていたので、何の迷いもなく東京の大学に進学。大学2年の時にイギリスに留学した際、現代アートに出会い、すっかりその面白さにはまり、帰国後すぐに美術館に電話をかけて、アルバイトを始めた。

卒業後は東京で展覧会の企画・運営、広報の全てに携わり、素晴らしいアーティストとの出会いにも恵まれ仕事は充実していた。一方、東京での生活は正体不明のモヤモヤ感があり、沖縄の島々を訪れるなど、モヤモヤの正体を探すような旅に出るようになった。

2011年3月、東日本大震災をきっかけに、「やりたいことは後回しにしないように」と、自分が幼い頃に過ごした里山で父と畑をやるために週末帰省するようになった。自分という存在をこの土地に受け入れてもらっているという、東京では味わえなかった安心感を感じる。同時に、久しぶりに訪れた里山は、手入れが行き届かなくなって荒廃し、自分の原風景とも言えるかつての美しい風景が失われていることに愕然とした。また、若い頃はまったく興味のなかった銅器、漆器といった高岡の伝統産業に関わっている同級生の工房を見学させてもらったところ、技術を受け継ぎ働く職人の姿とそこで生み出されるものがとても美しく、初めてその価値に気がついた。一方、現在の経済システムの中では割が合わないとして廃業者が増え、存続の危機にあると聞く。里山も伝統産業も、帰ればいつでもそこにあると思っていたものが失われようとしてる。自分のこれまでの経験やネットワー

クを活かして何かできることはないかと考えるようになった。なにより、富山で過ごす時間が自分にとって「豊かだ」と感じるようになり、富山に戻る決意をする。探していたものは、結局自分の故郷にあったようだ。



Photo by Yuki Tanaka

「散居村の夕景」砺波平野の散居村は、日本最大。約220km²にわたって広がる。春、水張りをした一面に夕陽が反射し幻想的な情景が観られる。

■自然と人の共生の賜 散居村

富山県民は、小学校で立山登山はするが、教科書にも載っている散居村の風景を上から眺めたことがある人は少ないと思う。私もその一人だった。5年くらい前に初めて眺め、自分でも驚くほどの感動を覚えた。広大な砺波平野に水田と屋敷林に囲まれた家々が広がる「散居村」。人がつくった風景がなぜこんなに美しいのか。

富山県は、3000m級の山々が連なる立山連峰に囲まれ、富山湾を抱くように平野が広がる。山を流れ下って豊かな雪どけ水は、富山湾に注ぐ。標高3000mの立山連峰から富山湾の深海部1000mまでわずか30km、高度差にして4000m、という地理的特徴がある。

砺波平野は、川が氾濫してつくられた扇状地で、肥沃だが水はけが良すぎ、本来は稲作には向かない。しかし、富山の特殊な地形のおかげ

で水量が豊富なため、耕せば田んぼにできる、と先人たちは砂利だらけの土地を開墾していった。ももとの水脈に沿って水路を引き、水田を開墾し、水はけが良すぎるので水の管理がしやすいよう、田んぼのそばに家を建てた。

家と家は一定の間隔がある。そのため冬の季節風で、吹きさらしになる家の南西に屋敷林（主にスギやヒノキ）を植え、東側に玄関をつくる「アズマダチ」という建て方になっている。都市計画をしたわけでもないのに、見事なまでに同じ方向を向き、全体的に秩序がある。自然のグランドルールの上に人が営みを重ね、500年をかけて人と自然が共生してつくりあげてきた風景。それがこの美しさの理由だとわかった。

■富山の土徳

厳しい開拓を支えてきたものは、日本三霊山の立山、白山があり古来から修験道が盛んだった土壌と浄土真宗の他力信仰である。富山の「アズマダチ」が東を向いているのは、西（西方浄土）を背にして仏壇を置くことにも由来している。

福光にある光徳寺に疎開した木版画の巨匠・棟方志功は、「いままではただの、自力で来た世界を、かけずりまわっていたのですが、その足が自然に他力の世界へ向けられ、富山という真宗王国なればこそ、このような大きな仏意の大きさに包まれていたのでした。（中略）富山では、大きないただきものを致しました。それは『南無阿弥陀仏』でありました※1」と、人のはからいを超えたところで作品がつくられるようになったと述懐している。棟方の師匠であり、民藝運動の創始者・柳宗悦がこの地を訪れた際、厳しくも豊かな自然環境の中で、恵みに感謝しながら生きる人々に出会い、「ここには土徳がある」と表現したと言われる。

「土徳」とは、人が自然と共につくりあげてきた、その土地が醸し出す品格のようなもの。散居村は土徳の象徴だ。「散村」のように見えるが、集落ごとに神社や寺が必ずあり、地域全体でコミュニティを築き支え合って暮らしてきた。そうした空気感が自然の中にも人々の間にも色濃く残っている。

■新たな旅のスタイル

2019年から観光を軸に富山の土徳を伝える「一般社団法人富山県西部観光社 水と匠※2」のプロデューサーとして活動している。ライフスタイルの変化の中で、屋敷林やアズマダチの古民家が減少している。風景だけでなく、文化や信仰、コミュニティも失われようとしている。失われるのは一瞬だが、取り戻すことは不可能に近い。この地に育まれてきたものは、富山にとってだけではなく、今の世界にとって大切な価値観だと思っている。旅を通じて、その散居村の保全と未来への継承に取り組む事業を開始したところだ。

築120年のアズマダチの古民家を再生した「楽土庵らくどあん」という宿を拠点に、周囲の景観・空間・アート・料理・アクティビティなどを通じて富山の土徳に触れることで、旅する人が癒され、さらにその旅が地域の再生にも寄与する新たな旅のスタイル「リジェネラティブ（再生）・ツーリズム※3」を提唱し、将来的にはトラスト運動につなげていきたいと考えている。



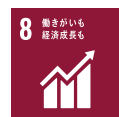
アズマダチの古民家を1日3組限定のアートホテルとイタリアンレストランに再生した「楽土庵」

「土徳」はどの土地にもあり、土地の内外の人と自然が磨き合いをしながら育むもの。事業をとおして、ここを訪れる人たちとともに「富山の土徳」をさらに育てていきたい。

※1 棟方志功の自叙伝『板極道』から引用。福光時代、棟方の作風は転換、司馬遼太郎は「他力の国に留学した」と評している。

※2 富山県西部6市行政（高岡市、氷見市、射水市、小矢部市、砺波市、南砺市）と約80の企業・団体により設立された観光地域づくり法人。2019年5月設立。2021年11月、地域連携DMOに認定。

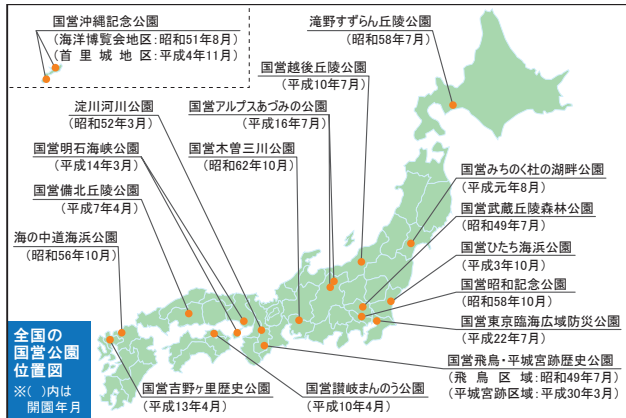
※3 観光庁「サステナブル・ツーリズム」実証モデル事業



特別企画

開園からまもなく四半世紀 越後丘陵公園・その魅力と役割

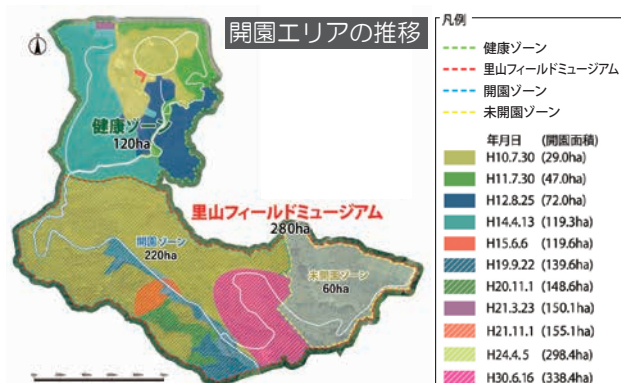
国営越後丘陵公園は、全国に17カ所ある国営公園の一つで、本州日本海側では唯一。来年で開園25周年を迎え、来園者数が1千万人に達する見込みだ。来年はまた、都市公園誕生から150周年でもある。国営越後丘陵公園のこれまでとこれから、魅力と役割について紹介する。



400ヘクタールの丘陵に広がる眺望

国営越後丘陵公園は、関越自動車道長岡インターチェンジにほど近い、標高100メートルあまりの丘陵地にある。付近には火筒型土器の出土で名高い縄文時代の大規模集落跡である馬高・三十稲場遺跡、新潟県立歴史博物館、雪国植物園などがあり、信濃川に育まれた縄文以来の歴史空間に内包されている。

1989(平成元)年に基本構想が策定され、1998(平成10)年に開園。この時は総面積400ヘクタールのうち、健康ゾーンの一部、29ヘクタールが開園した。開園以降も計画的に整備を続け、現在までに340ヘクタールが公園として利用されている。



香りのばら園や遊具がある健康ゾーンの一部から開園し、順次拡大。現在は未開園の60ヘクタールを整備中

この340ヘクタールは「健康ゾーン」「里山フィールドミュージアム」の2つにゾーニングされている。先に整備された健康ゾーンには、人気の高い「香りのばら園」を始めとするたくさんの花々、子どもたちに人気の水遊びの広場やふわふわドームなどの遊具がある。冬にはそり遊びやスキー、スノーシューなども体験できる。里山フィールドミュージアムには雑木林、山野草の群生地などがあり、移築した古民家での体験メニュー、パークゴルフ場などが整備されている。

丘陵地にあるため、平野部の市街地は見え、遠方の山々が借景となって眺望は良好。比較的市街地に近い公園でありながら、別世界にいるような、ともすると縄文時代にいるような気分にもさせてくれる。



里山フィールドミュージアム「あそびの里」のパークゴルフ場は、高原のような景観も魅力

世界で一つの「香りのばら園」

国営越後丘陵公園事務所長の笹岡和幸氏が「うちのキラコンテツ」と言う「香りのばら園」。オープンした2003(平成15)年、香りを7つに分類し香気を楽しむばら園は、世界のどこにも存在していなかった。

バラには500を超える香気成分が含まれ、品種によって複雑な香りを持っている。7つの香気は「ティー」「ダマスク・クラシック」「ダマスク・モダン」「フルーティー」「スパイシー」「ブルー」「アニス」。区画ごとにそれぞれの香りを代表する複数品種が植えられ、視覚だけでなく嗅覚で楽しむことができる。

これをさらに発展させるべく、2005(平成17)年からは同園で「国際香りのばら新品種コンクール」を開催。世界中の育種家から寄せられた新品種を、2年間同園地内で育てて育成条



およそ 800 種、2,400 株のバラが咲き誇る香りのばら園。コンクールで入賞した新品種の香りも楽しむことができる

件を同じにした上でその香気等を競うというユニークなもので、春と秋に審査を行い毎年6月に表彰式を開催。笹岡所長は「バラ育種家にとっては世界でもとくに権威の大きな国際バラコンクールの一つだと思う」と話す。入賞したバラだけを植えた区画もあり、毎年6月には香りのばらを目当てに県外客も含めて多くの来園者がある。

公園内の多彩な施設のうち、もっとも広域での集客がある香りのばら園だが、生まれたその理由は意外なことに地域密着を目指した取り組みからだった。長岡市内にはかつて、市民に広く親しまれていたバラ園があった。(株)北陸製作所の敷地内で育てられていたもので、毎年開花時期に一般開放。季節の風物詩となっていた。日本で「オープンガーデン」の概念が広く知られるようになるずっと前のことだ。これが閉園することになった際、惜しむ人々が多くいたため、地域貢献の観点から当公園が株を譲り受けてバラ園の継続を図った。

香りに特化したのは、設計段階で特徴を出すために加えられた戦略だった。市民に広く開放し、バラを育てることを通じて、愛好家の思いに香りのばらというコンセプトを加え、国際コンクールで世界に広める取り組みを続けている。

現在このばら園を見下ろす位置にはNHKがライブカメラを据えており、リアルタイム動画を番組の背景に用いている。笹岡所長は「たまに全国放送でも使われることがあります。国営越後丘陵公園という文字が入るので、県外からの来園にもつながっていると思います」と話す。

■ 全年齢層に多様なレクリエーションの場を

公園がその使命としていることは、里山の環境保全と多様なレクリエーションの場の提供。

広大な面積を活かし、老若男女すべての年齢層を対象としている。

「お子様連れなら第一に安心・安全！」と笹岡所長。人気の高い「ふわふわドーム」という空気で膨らませた山型のトランポリン遊具は、朝露で濡れていると滑るため、必ず水滴を拭き取ってから利用を開始。雨の日や、日照で高温になると利用停止となるため、現在屋根付きのドームを増設している。開園時には眺望を活かすため視界を遮る施設がほとんどなかったが、夏場の高温による熱中症に配慮した。



子どもたちに人気の高いふわふわドーム

健康増進には1周11キロのトレイルランニングコースや4キロのノルディックウォーキングコース等を整備。園内でトレイルランニング、駅伝、マラソンなどのスポーツイベントも開催している。また新潟県では唯一の公認パークゴルフコースもあり、シニア層で特に利用度の高い施設となっている。



日常的な健康増進も同園の役割の一つである。園内にはノルディックウォーキングなどのコースが整備されている。

里山の自然や暮らしを体験する里山フィールドミュージアムには、築百年を超える長岡地域の古民家を移築。田んぼの生き物観察や田仕事、“ちまき”づくり、草木染などの体験もできる。自然観察と豊富な体験メニューにより、学校の団体利用が年間百件前後(2020年度実績116件)に上っている。



古民家前の田んぼで稲刈り体験

香りのばら園は、盛りの6月・10月以外の季節でも草花が楽しめるよう管理されているが、バラの他にもクリスマスローズ、雪割草、カタクリ、チューリップ、アジサイ、ヒマワリ、コスモスと四季を通じてさまざまな花を咲かせ来園者を迎える。



9月中旬～10月下旬は、約30万本のコスモスが園内を彩る

■ 雪を活かした公園

日本海側の屋外施設運営では積雪が課題だが、12月から3月の間、健康ゾーンに限定し入場無料で開園。ソリ、スキー、スノーシューなど、雪遊びの場として提供している。ワイヤーロープで牽引するソリゲレンデ(ソリリフト)は家族連れだけでなく、小学校のスキー授業での利用も多い。学校・学年単位の利用でみると、1月・2月は秋の遠足シーズンに次ぐハイシーズンとなっている。

12月にはクリスマスイルミネーション、長岡ならではの花火打ち上げ等イベントも開催。

現在コロナ禍で開催日数を減らしているが、それ以前はイルミネーション期間15日で4万人余り(2018年実績)の来園があった。

また、冬期間限定で開かれる「えちごスノーワールド」は、延長150メートルのソリゲレンデを造成して、スノーアクティビティを提供。ハンドル付きのスノーレーサーも利用でき、スキーヤーやスノーボーダーがいる他のスキー場では得られない開放感を体験できる。

屋内では低温貯蔵した球根から咲かせた「アイスチューリップ」の展示、さまざまな遊具を備えたKIDSステーションがあり、雨や荒天の日でも楽しめるようになっている。



延長150メートル、開放的で眺望も良好なソリゲレンデ

長岡花火財団と共同で12月に開催した「長岡花火ウインターファンタジー」



■ ボランティアも年々増加

香りのばら園はもちろんのこと、人の手が加わってはじめて成立する、里山の自然環境を維持するには多くの人手が必要になる。開園した1998(平成10)年に2つのボランティア団体と連携、現在までに7団体が参加し管理運営をサポートしている。地域密着を目指す同園にとって、ボランティアは貴重な存在だ。

笹岡所長は「スタッフと業者だけではやりきれないところをお手伝いしていただいて非常にありがたい。同時に参加してくださっている方々には『里山の管理』をアクティビティとして楽

しんでいただきたい」という思いがある。「仲間もいるし、教えてくれる人もいる。やりたくても、自分の里山を持っている人は多くはありませんから」と話す。ボランティアスタッフの活動を通じて、地域のために里山保全のノウハウを身につけた人が増えてほしいと願っている。

香りのばら園のボランティアスタッフは、同園のキラコンテンツだけに、新潟市など長岡市外からの参加も多い。

ここ数年では年間の延べボランティア活動人数は2,500人前後で推移。開園以来ではまもなく5万人に達する。



6月の盛りを終え、秋に向けたバラの剪定作業。ボランティアの作業は涼しい早朝に行われている

■ 来園1千万人達成とその先に向けて

同園はホームページのほかTwitter、Instagram、FacebookのSNSでも情報を発信。14箇所に設置したライブカメラ画像も公開し、情報発信に努めている。来園者は、直近のイベント情報のみならず、目当ての花の見頃や現地の天候、混雑具合まで確かめてから訪れることができる。

今年は、バラの盛りの時期にドローンを使って撮影し、動画共有サイトYouTubeで公開。これが民放TVの人気番組「マツコの知らない世界」で放映された。SNSは個人に対しての情報発信として有効だが、動画を用意してマスメディアでも手軽に利用できるようにしておくことが、広く知ってもらえるチャンスにつながっている。

同園では「みつけイングリッシュガーデン」を始め、近隣の施設と連携した花のツアー企画にも積極的に取り組んでおり、ツアーを機にリピーターを増やしたい考えだ。花火イベントも年数回実施しており、8月の花火大会以外でも長岡花火を楽しめる場として来園者を迎えている。

利用度の高いパークゴルフは、富山県では公認コースが多く盛んだが、新潟県ではここが唯一の公認コース。笹岡所長は「競技人口が増えれば利用者が増える。ここでの体験を機に県内にもっとコースができてくれれば」と期待する。

未整備の残り60ヘクタール内に、新しくマウンテンバイクコースが完成予定。さらに「森のめぐみの里」と名付けた森林ゾーンの整備を進めている。ようやく400ヘクタールの全開園が見えてきた。

これまでの来園者は、初年度10万人からピークの2015(平成27)年度には55万人に達した。これは開園以来さまざまなイベントを企画・実施した結果で、その後も50万人前後と落ち着いている。コロナ禍でも30万人以上の来園があり、地元を中心に根強いファン層があることが伺える。コロナ禍となった2020年11月には累計900万人目のお客様を迎えくす玉を割った。一時は今年度内に1千万人に達すると予想されたが、第7波の蔓延により、記念すべき1千万人目の来園者は来年度早々になる見込みだ。

来年度は累計来園者1千万人とともに開園25周年を迎える。笹岡所長は「地域に愛され必要とされる公園であることを第一に、遠方からも多くの人を迎え、地域の交流人口拡大に貢献できる施設であり続けられるよう日々努力を重ねていきたい」と話している。

取材・文 橋本啓子



笹岡 和幸 越後丘陵公園事務所長
「開園した当時親に連れられて来た子どもたちがいま子育て中。この世代が子どもを連れて来てくれるかが、これまでの取り組みの評価だ」と話す

越後丘陵公園
ECHIGO HILLSIDE PARK

<https://echigo-park.jp/>



クラフトジン 新しいツーリズム拠点

植物由来の爽やかな香りが特徴で、カクテルベースでは定番の蒸留酒ジン。近年世界的に、ジンそのものの個性を楽しむ飲み方が定着し、日本各地でジン蒸溜所が生まれクラフトジンブームが到来している。北陸地域ではいち早く、2020年からクラフトジン「YASO (ヤソ)」を製造する(株)越後薬草は、他とは一線を画する蒸溜所だ。この秋、新しい蒸留器を導入し、これに合わせてテイastingもできる新建屋を建設した。



◀ インターナショナルワインアンドスピリッツコンペティション2022で金賞を受賞したYASO GIN2022。瓶のデザインは発酵時に使っている80種の野草を視覚化した80本の線だが、蒸留後に加えているハーブ類が70種あり、150というナンバーが付いている



▲ YASO GIN2022に使われている主なハーブ。上(赤)から時計回りでピンクペッパー、ベルガモット、ジュンパーベリー、コリアンダー、カルダモン。同社ではほかに月替りでフレーバーを変えたジン、ジンを割るトニックウォーターも製造している

■ 地域の個性が活かせるクラフトジン

ジンは、ジュンパーベリー(ヒノキ科の針葉樹の実)を主として香り付けした蒸留酒のことで、かつては薬として用いられた。日本の酒税法上ではラム酒やウォッカなどとともにスピリッツに分類されている。ジンはアルコール原料(糖類)に限定がなく、「ジュンパーベリーを用いた蒸留酒」であればあとは何を足してもよいため、自由度の高い、製造元が個性を出せる酒だ。

熟成期間がいないため、ヨーロッパのウイスキー蒸溜所が個性的な香りをつけジンとして販売したことがクラフトジンブームの始まりだった。数年前からは日本国内でも、地域の個性を活かした小規模の蒸溜所が次々と製造を開

始。ウイスキー大手のサントリーやニッカ、養命酒製造株式会社もジンに参入し、個性的なクラフトジンを揃えた飲食店も増えてきている。

■ 「日本野草の王様」ヨモギから生まれた

(株)越後薬草はヨモギ加工品製造から創業し、現在は薬草酵素飲料のOEM*生産をおもに行っている。ヨモギは古来身近な薬草として最も親しまれてきたものだが、上越地域は知る人ぞ知る国産ヨモギの主産地だ。

酵素飲料は、薬草にさとうきび等の糖を添加して発酵させることで取り出す。この時できるアルコールは不要なため加熱して飛ばすのだが、長時間の加熱により品質が変わるため2018年に減圧蒸留釜器を導入。減圧して沸点を

下げ、低温でアルコールを蒸発させることができる。梅田智博製造部長は「これで製品の質を上げようということだったんですが、出てきたアルコールを舐めてみたら『なんか美味しい!』『これ売れるんじゃないの?』となったのが始まり。商品になるか調べたとき、海外でクラフトジンブームになっていることを知りましたが、ブームとは関係ないところからスタートしています」と話す。



新規導入した蒸留釜。「これで3度蒸留ができるようになって、雑味を除いて植物の良いところだけを抽出できるようになった」と話す梅田製造部長(中央) 昨年から蒸留家として働く杉川郁実さん(右)と山田依織さん(左)

ヨモギを始めとするさまざまな薬草とともに発酵させ、蒸留後にジュニパーベリーその他の薬草類を加えて再蒸留するため、ジンの原酒の原料としては飛び抜けて数の多い80種類となる。軽やかな緑の線が印象的な瓶のデザインは、80種の野草を視覚化したもので、80本の線があるという。「ジンはもともと薬として作られたもの。まさかお酒を造ることになるとは思わなかったが、創業以来ヨモギを使ってきたわれわれにとってふさわしい製品だ」と梅田部長は言う。

クラフトジンで新たなツーリズムを

同社は北陸自動車道上越ICから近く、新潟、富山方面、上信越自動車道で長野方面へのアクセスにも優れている。新築した蒸留建屋は、ツーリズムで地域に貢献することも目指した。

長野県内では既に多数の蒸留所があり、富山県、石川県でも複数企業が準備を進めている。数が増えれば多様性も増し、日本酒の酒蔵めぐりのようなツーリズムや、イベントの企画も可能になる。

加えて上越市は「日本のワインの父」と呼ばれる川上善兵衛かわかみぜんべえ、日本の醸造の基礎をつくった坂口謹一郎生誕さかぐちきんいちろうの地で、それぞれの地には岩の原葡萄園、坂口記念館がある。越後薬草は岩の原葡萄園とも坂口記念館とも車で20分弱の場所に位置しており、梅田部長は「坂口博士はサントリー創業者の鳥井信治郎とりいしんじろうを川上善兵衛に引き合わせた両社にとって恩人のような人。うちを挟んで3ヵ所巡ってくれるようになったらうれしい」と話す。



蒸留所は取材時にはまだ設備工事中。植栽は原料に使っている野草を中心にしたが「ヨモギは恐ろしく増えるので植えられませんでした」とのこと

取材・文 橋本啓子

※「Original Equipment Manufacturing (Manufacturer)」の頭文字をとった用語。自社で製造した製品を、自社ブランドではなく、他社のブランドで販売する製造業社のこと

問い合わせ先

(株) 越後薬草
新潟県上越市小猿屋 73 番地
北陸自動車道「上越 IC」より車で約 6 分
上信越自動車道「上越高田 IC」より車で約 20 分
TEL : 025-544-3050
※見学は要問い合わせ



令和元年台風19号千曲川水害 デジタルアーカイブ構築・利活用事業

信州大学 教育学部 廣内研究室 内山 琴絵

■事業の概要

令和元年10月の台風19号（令和元年東日本台風）では、全国的に記録的な雨量を観測し、各地で河川の氾濫、土砂災害、浸水被害が相次いで発生した。全国で142か所の河川堤防が決壊し、このうち千曲川管内では生田水位観測所（上田市）、杭瀬下水位観測所（千曲市）、立ヶ花水位観測所（中野市）の3地点で氾濫危険水位を超過、とくに立ヶ花水位観測所では計画高水位の超過時間が7時間を超え、長野市で堤防が決壊したほか多数の越水被害が発生した（国土交通省北陸地方整備局、2020）。この台風災害によって、長野県では死者23名、重傷者14名、軽傷者136名の人的被害が発生し、家屋の全壊920棟、半壊2,496棟、一部損壊3,569棟、床上・床下浸水合わせて1,360棟の甚大な被害が発生した（図1）。



撮影：2019年10月13日
場所：長野市穂保 千曲川堤防決壊地点周辺
提供：長野県建設部（災害デジタルアーカイブより）

図1 令和元年東日本台風による被害

千曲川流域では、過去にも大規模水害を繰り返してきた歴史がある。人口の多くが平野や盆地に居住する我が国においては、こうした災害に対して歴史的にも、地域で災害文化などを継承するソフト的な対応がなされてきた。水防施設の強化によって水害が低頻度化する中で、災害記録を適切に保存し、活用できる仕組みをつ

くる事は、繰り返す災害に備える上で不可欠な取り組みである。

また、千曲川流域のみならず全国各地で災害による被害が毎年のように発生するなか、地域全体の防災意識を底上げし、「逃げ遅れゼロ」となるような地域防災力の向上を図るためには、住民が災害を自分事として捉え、自らの地域が経験した過去の災害を学び、語り継いでいく仕組みの構築と運用が重要である。

以上の問題意識から、本事業では、令和元年東日本台風によって千曲川流域で発生した被害の記録や教訓を、Web-GISを用いたデジタル媒体で保存・公開し、さらにその効果的な活用を提案しながら、将来的には流域住民がこれを利用する形で自立的に運用し、将来の水害に備えることのできる仕組みづくりを目指している。そのために「令和元年台風19号千曲川水害デジタルアーカイブ」を構築し、その試行的利活用について提案する。

■研究活動経緯

本事業は、「国土の利用・整備・保全に関する資料等収集整理事業」として令和2年度から（一社）北陸地域づくり協会に助成をいただき研究を進めている。これまでの活動成果について図2に表した。



図2 これまでの事業成果の概要

令和2年度は、水害発生時の記録収集およびデジタルアーカイブの機能構築を中心に進めた。令和3年度は、さらなる記録収集を行ってコンテンツを拡充し、水害から2年となる10月12日にアーカイブのホームページサイトを一般公開した。また、これまでにアーカイブの試行的利活用として、本助成金受託団体に働きかけて、長野県各地を巡回するアーカイブ展を2年連続で開催したほか、学校における防災教育の試行的実践を行った。助成3年目となる令和4年度は、これまでの取り組みによって基盤が整備されつつあるデジタルアーカイブを今後も利活用可能な形で構築するうえで、これまでの成果を引き継ぎながら発信することを重視して展開している。

■千曲川水害デジタルアーカイブの特徴

東日本大震災以降みられるような情報保存を主な目的とした既存の災害アーカイブとは異なり、本事業では構築するデジタルアーカイブを学校教育や生涯学習、地域防災で利活用できる仕組みづくりを目指している点で独創的である。そのために、画像や動画などの記録情報がどこで起こったかを示す位置情報を付加し整理して、空間的検索を可能にしている。収集した写真は「災害発生の記録」、「復旧の記録」、「復興の記録」、「その他」の4項目に類型化し、カテゴリごとにレイヤを作り地図上に表記できるようにした(図3)。



図3 水害デジタルアーカイブ表示例

構築したアーカイブサイトは、次の5つの機能を持っている。

1つ目は、地図アーカイブ(デジタルアーカイブ)である。地図上にアイコンを表示し、クリックするとインタビュー動画、被災写真、復旧・復興写真が表示される。これによって、いつ・どこで・何が起きたかについて分かる仕組みとなっている。

2つ目は、写真アーカイブである。収集したコンテンツは、基本的には地図アーカイブにデータを表示させているが、なかには位置の特定が難しい写真等もある。そこでそうした写真を各地域、時制(被災～復旧～復興)でまとめてアルバム形式で表示している。

3つ目は、資料アーカイブである。本アーカイブでは、写真や動画だけでなく、行政等の作成・公表している資料についても収集・公開している。データは、災害発生時・復旧・復興のカテゴリに分類し、行政名・資料名・二次利用の可否が分かるように表示している。

4つ目は、インタビュー動画である。様々な立場で被災した住民・行政担当者・学校関係者・ボランティアなどにインタビューを実施し、字幕を付けて編集した動画を掲載している。

5つ目は、災害アーカイブ展特設サイトである。「災害アーカイブ展」のオンライン展示物を閲覧することが可能である。

千曲川水害デジタルアーカイブは、令和元年東日本台風をメインターゲットとして、水害の実態や教訓を収集し、インターネットで広く公開している。デジタルアーカイブは、北陸地域にとどまらず今後水害が起こりうるなどの地域にも有用な情報を提供できる災害情報の社会インフラとなる。また防災教育プログラムやオンラインでの災害アーカイブ展の成果も、特にコロナ禍における情報提供方法として他地域に援用可能なモデルとなり、成果の波及効果は極めて大きいと考えられる。さらに、構築したアーカイブを学校教育やシンポジウム、展示会など生涯学習の枠組みで利活用することは、子どもから高齢者まで、地域に住む幅広い世代が防災・減災について学習する機会となるため、地域防災の観点からも有用なツールだといえる。

データの収集方法

本事業で収集する記録は、主に2019年発災時の被災写真のほか、復旧～復興にむけて変わる地域の姿、人々の活動の様子などである。多くのご協力のおかげで、これまでに5,317件のデータを収集することができた（R4年5月現在）。写真については撮影者と直接交渉し、データの形式で共有いただいた。本事業はインターネットの地図に写真等を落とし込んで公開するものであるため、データの空間情報についても同時に収集することが必須となる。そのため、データを収集する際、撮影者に撮影場所を地図上に表示してもらった。

インタビュー動画については、これまで水害被災者を中心として、支援者、行政担当者、学校関係者等にお話を伺ってきた。水害被災者のなかでも、子育て世代のお母さん、障がいのある方、高齢夫婦など多様な住民を対象として体験談を収集するように努めている。体験談の収集は、被災前から被災当日の様子、復旧、復興について質問項目を提示し時系列で質問をする半構造化インタビューの形式で行っている。

これまでの成果

本事業で構築する令和元年台風19号千曲川水害デジタルアーカイブは、①「記録収集」②「機能構築」③「利活用」の3つのプロセスを経て事業を展開している。事業初年度の令和2年度はアーカイブの基盤を構築する段階にあり、令和元年千曲川水害に関わる画像や映像の収集、被災者インタビューの実施と映像コンテンツ化を行って「2019年発災時の記録収集」をした。また、ホームページサイトの構築、位置情報を付加したWeb-GISへのコンテンツ集積を行い「機能構築」を行った。さらに収集したデータを活用して、長野県内各地でアーカイブ展を開催した。

その成果を引き継ぎながら、事業2年目の令和3年度は被災から復興までの経過を含めたインタビューを多様な住民に行うなど、地域の変化にフォーカスした記録収集を行い、アーカイブサイトの一般公開を行った（図4）。



図4 アーカイブサイトトップページ

さらに「利活用」として、長野県内各地において2年連続で災害アーカイブ展を開催した（図5、表1）。新型コロナウイルス感染拡大状況下において、オンライン展示も同時に開催した。



図5 アーカイブ展 長野市長見学の様子

	日程	場所
R3年度	2021年10月11日～22日	長野市役所 2階 渡り廊下
	2021年11月 5日～ 7日	白馬村 ウイング21
	2021年11月17日～26日	白馬村役場・小谷村役場
	2021年11月20日～24日	長野市役所 1階 市民交流ホール
	2021年12月 7日～19日	県立長野図書館
R2年度	2020年10月 9日～16日	長野市役所 1階 交流スペース
	2020年10月12日～16日	長野県庁
	2020年10月19日～26日	信州大学中央図書館 1階 展示コーナー
	2020年10月27日～31日	長野駅ビルMidori 3階 りんごのひろば
	2020年11月 6日～ 8日	白馬村 ウイング21
	2020年11月11日～13日	伊那市役所
	2020年11月18日～27日	白馬村役場・小谷村役場

表1 これまでのアーカイブ展開催実績

2年目となるアーカイブ展では、令和元年東日本台風による災害記録だけでなく、復旧・復興にむけて変わるまちの姿や人々の活動の様子が分かる写真をパネル化して展示した。また、アーカイブを利用した防災教育の取り組み、JR東日本長野支社に提供いただいた新幹線車両センターの被災の様子、研究を連携している熊本大学における平成28年熊本地震デジタルアーカイブ

イブの紹介、共同研究を行っている（株）LIXILの避難所関連設備等の展示も行い、来場者の防災意識向上につなげるために幅広い内容の展示となるようにした。さらに、展示会場に即した展示内容になるよう、災害記録写真をその地域で撮影されたものにする、地域の過去の災害について説明したパネルを追加するなどして、来場者が災害・防災を身近に感じることが出来るような工夫をした。

さらに試行的利活用として、コンテンツを活用した学校における防災教育の試行的実践を行った。具体的には令和元年台風の被災地に接する小学校における授業実践である。令和3年度は小学校3年生・5年生の児童にフィールドワーク用のタブレット端末を用意し、地域を歩いて危険箇所を確認し、被災時の行動を考え、防災マップおよびパンフレットをつくるプログラムを試行的に行った。3年生は水害に対する学区域の危険箇所、安全箇所をグループで歩き、ハザードマップと重ね合わせたオリジナルな防災マップを作成した。さらにその情報を活用して水害防災パンフレットを作成した。5年生はハザードマップを用いた防災マップづくりに取り組み、学区域全体で起こりうる土砂災害の危険箇所や安全箇所をまとめた防災マップを作成した（図6）。教育実践の成果として、単元の取り組み前後で3年生および5年生の児童の防災意識を比較したところ、自分の住む地域を知り、水害に対する危険性の認識、災害に備える意識が高まったことが分かった。



図6 防災学習における成果（一部）

この成果から、本防災教育実践は、学校や地域での活動成果をアーカイブサイトに掲載・更

新しながら、災害とこれに備える情報や仕組みを自立的、継続的に運用できる仕組みづくりに寄与するものだといえる。今後はweb-GISのアーカイブサイトとリンクした活動を計画している。

■今後の活動

令和4年度は、引き続き記録収集、試行的利活用を行いながら、その成果の発信に重点を置いた活動を展開している。具体的には、10月7日～18日にかけてアーカイブ展を開催するほか、水害発生日の10月12日には3周年シンポジウムを開催し、これまでのアーカイブ事業の成果及び今後の活動の展開について市民向けに発信する。

さらに、北陸地域の歴史的な水害記録を収集する団体(歴史的な水害史料活用研究会)とも連携し、千曲川流域の歴史的な水害についてもアーカイブサイトに反映できるような機能を試行的に構築する予定のほか、小中学校におけるアーカイブを活用した防災教育の試行的実践も継続して行う。

本事業では、構築する千曲川水害デジタルアーカイブを学校教育や地域防災で利活用する仕組みの構築をめざしている。この仕組みは、事業終了後も流域の学校での防災教育活動や地域防災活動での主体的な活用へ自ずと繋がるものである。

しし まんすい
“猪の満水”（令和元年東日本台風）
災害デジタルアーカイブ

<https://chikuma-archive.shinshu-bousai.jp/>



ぜひ一度アーカイブサイトをご覧ください。

参考文献

- 国土交通省北陸地方整備局(2020) 令和元年東日本台風 北陸地方整備局管内の被害記録 <https://www.hrr.mlit.go.jp/bosai/igasinihontaihuu/web.pdf> (最終閲覧日: 2022年9月6日)
- 長野県危機管理防災課(2021) 令和元年東日本台風(台風第19号)人的被害・住家被害の状況(令和3年9月6日現在) <https://www.pref.nagano.lg.jp/bosai/kurashi/shobo/bosai/bosai/r1typhoon19/documents/210906typhoon19higai.pdf> (最終閲覧日: 2022年9月6日)



地域にのこる川除絵図・河川図を防災・減災に活用を

歴史的水害史料活用研究会(代表 古本吉倫 長野工業高等専門学校教授)

■研究事業の背景

毎年、地震、豪雨による重大な災害が発生している。長野県内では2019年10月に千曲川の堤防が決壊するなど流域でかつてない大水害が起きた。これを契機に災害への備えの重要性が改めて認識されているが、災害による被害を減らしていくためには何ができるのか。

河川工事などの対策はもとより、地域で水害に対する関心を高めていくことが大切だと考えた。各地に残されている歴史的な水害記録、地図などは、地域や住民にもわかりやすく、災害に対する地域の取り組みの参考になるのではと、長野県内の千曲川水系に残るそれらの史料を収集し、保存と活用に取り組むことにした。

事業は、令和2年度から3年間、(一社)北陸地域づくり協会の「国土の利用・整備・保全に関する資料等収集整理事業」として支援をいただき進めている。

研究活動は、河川工学、歴史学の両分野の研究者(信州大学・長野高専・長野県立歴史館等)からなるグループにより、史料からみた水害の特徴や課題などを成果にまとめるとともに、地域や団体と協力して、史料を活用し、地域や住民へアピールする事業を目指して進めている。

具体的には、

- ①千曲川流域の各地に存在する歴史的水害の原史料(写含む)を収集し、整理する。
- ②史料保存のため撮影デジタル化する。
- ③大学高専の学生研究を含む専門分野の研究への資料活用を支援する。
- ④複製資料など作成し、地域学習、地図展示や講座を開催し、研究成果を還元する。

■研究事業で収集した図面

①県立歴史館所蔵絵図、地図

江戸時代の川除の絵図(大きさが最大10mにも達する巨大図面もあり。図2など)

明治大正時代の千曲川などの測量図(縮尺1/2000から1/3000)など

②地域に残されている図面

千曲川水系(佐久穂町、上田市、長野市、小布施町、中野市、飯山市、松本市、池田町)で水害研究などに資する絵図など、これらの地域の古地図等について、ご理解を頂き、図面を借用して撮影を行った。宮内庁公文書館の史料も入手した。

■図面のデジタル化と画像閲覧

図面史料はサイズが大きいため分割して撮影、原本と同じように接合した画像に合成して、利用できる形式のデータに変換。これらのデジタルデータをパソコンで閲覧できるシステムを提案し、県立歴史館では令和3年度末から館内でデジタル閲覧が開始された(図1)。この方法では大型図面を全体像から、部分的に拡大していつでも自由にみることができる。



図名	図数	縮尺
長野県測量図(河川図面:千曲川水系)	250	
長野県測量図(河川図面:天竜川、木曾川水系)	137	
長野県測量図(道路図面:国道から県道)	105	
長野県測量図(橋梁の設計図)	88	
長野県測量図(鉄道関係図:篠ノ井線、飯田線)	31	
長野県測量図(木曾川の発電所)	21	
長野県測量図(水道設計図、境界図、地割などの図面)	32	

図1 長野県立歴史館「長野県測量図」・「絵図・地図」閲覧システムメイン画面

■デジタル図面とGoogle画像との重ね動画

明治時代の測量図は、三角測量等を用いているため、図面の精度が期待できる。そこで、この図をウェブ上のGoogle画像に貼り付け、透視した状態で空中から俯瞰しながら、川に沿って移動していく動画を作成した。

このような方式での図面資料の閲覧は分かりやすいとの声を頂いている。これまでに、高瀬



図2 江戸時代の巨大な川除絵図「寛政9年梓川川除絵図」(長野県立歴史館所蔵 絵図地図 9/8/2)

川、梓川の平地部分と千曲川の佐久穂町から中野市立ヶ花までを作成し、活用している。

■ 図面史料を活用した地域でのとりくみ

デジタル化した江戸時代、明治時代など河川の図面には、どのような川除工事、治水工事を行ってきたかなどが記されており、川筋の変化、災害の起きやすい場所の特徴などが読み取れる。デジタルデータからの複製図などを活用して展示事業を2箇所で開催した。

実施に当たっては、開催地の市町村などの協力を得て、ハザードマップなどの展示も行った。

年度	名称	場所	備考
2020	高瀬川かわものがたり	池田町	町と共催
2021	梓川かわものがたり	松本市 梓川	地元実行委員会 などと共催

■ 梓川かわものがたり

— 水害と開発を絵図から探る —

松本市梓川でおこなった「梓川かわものがたり」を事例に図面を活用した展示について紹介する。

① 地元との連携体制

〈主催〉 梓川かわものがたり実行委員会 (会長: 長岡寿 地元実行委員 10名で構成) と共催
 〈共催〉 長野県梓川土地改良区 中信平土地改良区 連合

〈主な後援機関〉 松本市、安曇野市、両市の教育委員会、長野県立歴史館、国土交通省千曲川河川事務所、長野県松本建設事務所などの関係行政機関、報道各社

② 実施期間: 令和4年6月8日から19日(11日間)

※当初令和4年2月開催を予定したが、新型コロナウイルス感染症の状況をふまえ延期。

③ 展示絵図

- ・ 県立歴史館所蔵の梓川の地図絵図の撮影データを用いた実寸複写図面 (江戸、明治、大正)
- ・ 地域に残されている梓川や堰、水路開発などの絵図、図面、資料
- ・ 梓川の過去の水害、水利用などのパネル
- ・ 防災マップなどの公的資料

④ 併催行事として講演会等を実施

〈日時〉 6月12日(日) 13:30 ~ 15:30

〈会場〉 松本市 梓川アカデミア館

〈内容及び講師〉

■ 「宝暦大満水と川除普請」

関 通喜 (実行委員会)

■ 「梓川を描いた巨大絵図、測量図」

山浦 直人 (県立歴史館名誉学芸員)

- ・ 定員50名で受付、予約をこえ当日は80名が参加

⑤ ギャラリートークとして、展示絵図等の説明を実行委員会メンバーが担当

- ・ 4日間で計10回実施、毎回10数名が参加
- ・ 各日とも10:30 ~ と 14:00 ~ の2回

⑥ 展示に先立ち、地元紙に展示内容の記事が連載された。市街地から離れた会場にもかかわらず期間中合計650名の入場者があり、地域の水害や水利用への関心の高さを感ずることができた。

- ・ この展示では、地元実行委員会が準備から運営までボランティアで活動を担っていただくなど、地域の取り組みとして大きな成果になった。展示の詳細はネットでも見ることができる。

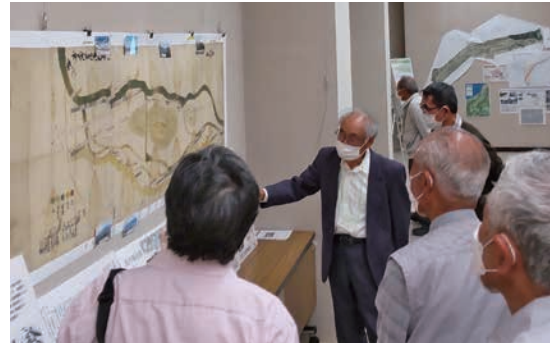
松本市公式観光情報「新まつもと物語」
市民記者ブログ

<https://visitmatsumoto.com/category/history/>

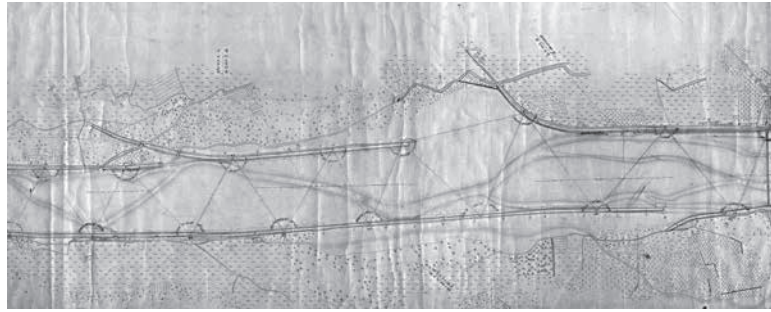




「梓川かわものがたり」の展示会場



地域に残る川除絵図なども展示

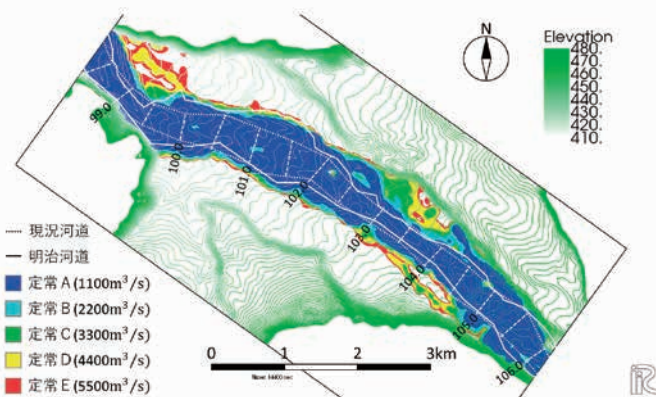


大正時代の河川図にみられる霞堤防（長野県立歴史館所蔵 長測図 760 梓川平面図）

■ 史料を活用した学生研究の支援

信州大学工学部 豊田研究室では、卒業研究や修士課程の学生や院生がデジタル化した明治時代の測量図を使った河川工学の研究に取り組んだ。また長野高専 古本研究室では、学生の卒業論文で図面史料のアーカイブのあり方についての研究に取り組んだ。

デジタル化した図面史料の活用はまだはじまったばかりだが、防災マップへの反映や地域での学習利用などさらに活用を広げていける可能性があると思われる。



デジタル化した明治時代の実測横断面図を使った千曲川の河道復元図（信州大学修士論文より）

■ 今後に向けて

当研究会では、令和2年度から信州大学教育学部などが主催する「災害アーカイブ展～令和元年東日本台風からの復興にむけて～」にも参加し、長野市役所などでの展示も行っている。今後も、他地域での図面資料を活用した展示などに取り組むとともに、デジタルデータを広く活用できるよう、デジタルデータのリスト公開、史料のウェブ公開などの研究にも取り組んでいく。



デジタル図面を Google 画像と重ねて見るとわかりやすいと好評

研究事業の成果は、次の2つの報告書にまとめ、県内図書館などに寄贈。ご希望の方には、余部の範囲でご提供できます。

- 千曲川水系と図面史料（令和3年3月発行）
 - 千曲川水系と図面史料Ⅱ（令和4年9月発行）
- 〈連絡先メール〉 yama3417@mx2.avis.ne.jp



令和4年8月豪雨で新潟の県北地方、石川県加賀地方に 北陸地方防災エキスパートが出動しました

令和4年8月3日から4日にかけて、東北地方にのびていた前線がゆっくりと南下。この前線に向かって湿った空気が流れ込み、大気の状態は非常に不安定となりました。新潟県北部を流れる荒川、石川県加賀地方を流れる手取川・梯川てどりがわの各流域では猛烈な雨が降り、荒川に沿って走る直轄国道113号を含め、各沿川地域に大きな被害をもたらしました。

この豪雨を受け、国土交通省の羽越河川国道・新潟国道・金沢河川国道各事務所からの要請により、防災エキスパートの皆さんから出動いただきました。新潟県北部と石川県西部という

離れた地域で同時期に出動というのは珍しく、また豪雨災害で道路関係のエキスパートが出動するのは平成16年7月の「新潟・福島豪雨」以来（およそ20年ぶり）となりました。

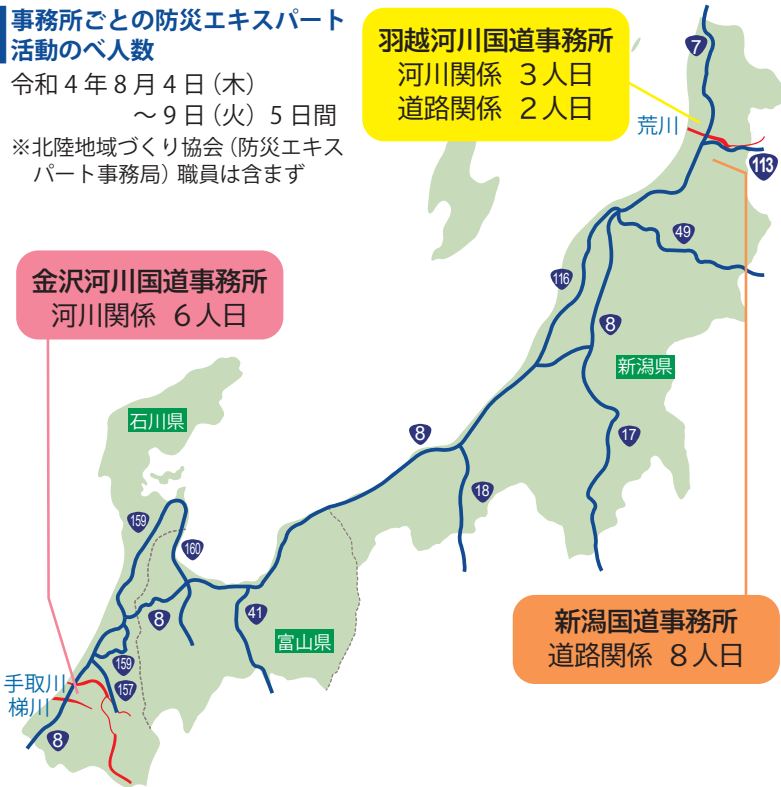
防災エキスパートはそれぞれ豊富な経験・知見をもとに、現場の確認から被災箇所の復旧工法や復旧に係る調整、通行止めとなった国道の交通開放等について助言を行い、要請元の期待に応えたところです。

この災害対応支援で得られた教訓は、今後のエキスパート活動が円滑かつ適切に運用できるよう活かしていきたいと考えています。

防災エキスパート派遣状況

事務所ごとの防災エキスパート活動のべ人数

令和4年8月4日(木)
～9日(火)5日間
※北陸地域づくり協会(防災エキスパート事務局)職員は含まず



羽越河川国道事務所

河川



荒川被災箇所の現地確認



机上確認

道路



村上国道維持出張所での打合せ

新潟国道事務所



R113 被災箇所の現地確認



事務所での打合せ

【北陸地方防災エキスパート】

地震・風水害などの大規模災害時に、迅速・確実・効果的に対処するため、公共土木施設の整備・管理等に長年携わり、一定のノウハウを持った人々を「防災エキスパート」として登録する制度。平成8年3月に発足し、その事務局を北陸地域づくり協会が担う。



シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」

おらほの足を守る —JR只見線・全線運転再開—

■只見線の選択

東日本大震災が起きた2011年3月。福島を試練が始まった年の7月、今度は新潟・福島豪雨により、只見川橋梁が流出するなどの甚大な被害が発生、JR只見線は会津川口（金山町）—只見（只見町）駅間の27.6kmが不通になってしまった。赤字路線の復旧は困難を極めた。復旧のめどが立たないなかバスによる代行運転が続いていたが、存続を求める地元の要望を受け、2018年6月に復旧・再開通に向けた工事が始まった。県が線路や駅舎などを保有し、JR東日本が運行を担う全国的にも珍しい「上下分離方式」を採用。今年5月になって、10月1日に全線開通させることが正式に発表された。JR只見線は元の繋がった線として、あらたなスタートを切る。

■只見線の歩み

只見線とは会津若松（会津若松市）から小出（新潟県魚沼市）間の36駅を結ぶ全長135.2kmの鉄道路線。この敷設には奥会津の林産物、鉱産物資源の開発、さらには只見川の電源開発が大きく関わっていた。明治32年に郡山—若松間が繋がったものの、その後は数駅が数年の時をかけて繋がっていき、さらに宮下—川口間に至っては昭和31年にやっと会津線として繋がった。ここに至るには、昭和28年に着手された田子倉ダム建設（昭和35年完成）、その他流域のいくつかのダム建設の需要が大きな後押しとなっていた。当初、川口—只見間は資材運搬専用線として敷設されたものだった。いずれ国鉄

に編入されるはずの線だったが、数年にわたる交渉を経てようやくの編入だった。昭和32年から会津川口駅に勤務していた青柳雄一さん（83）は、「駅の中は押すな、押すなの人であふれ、あの頃は忙しかったなあ」と感慨深げに当時を思いおこす。幾多の困難を乗り越えて、昭和46年に現在の只見線の形で営業が開始された。この路線は日本有数の豪雪地帯にあり、今でも福島県と新潟県とをまたぐ峠を越えられるのは只見線だけとなっている。

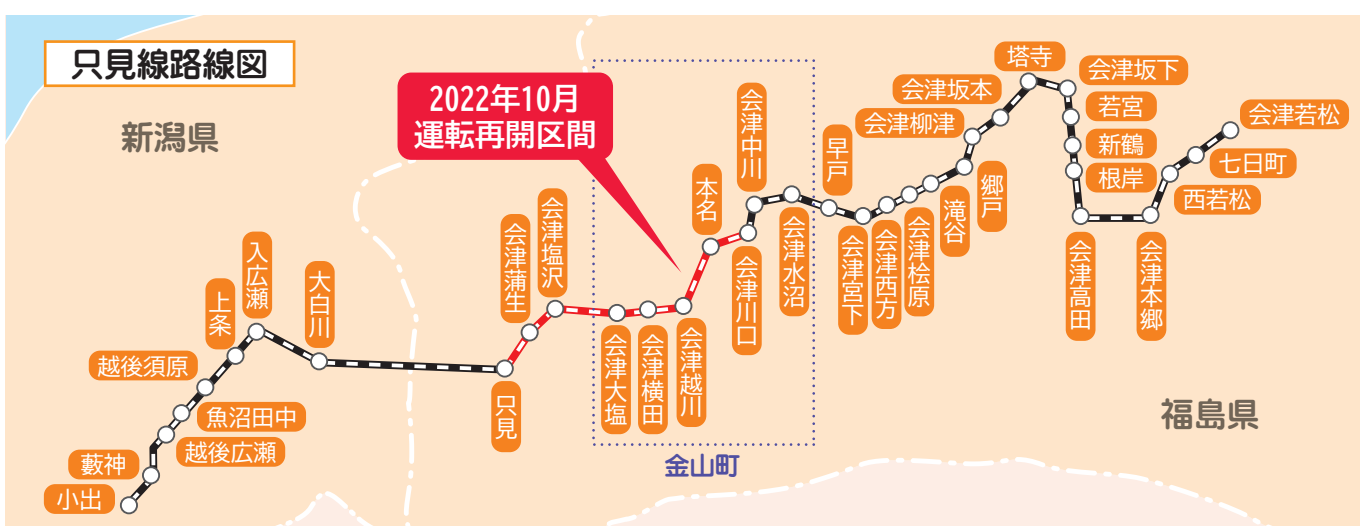
■おらほの駅

36の駅からなる只見線の中でも、金山町には最も多い7つの駅がある。そのうち唯一の有人駅である会津川口駅。かつて駅長を勤めた中丸吉之助さん（86）はこう語る。「自分の集落に駅がある人たちは、昔から“おらほ（自分達）の駅”って感覚があるな。だから俺たちで守っていくなんねって思ってる。草刈りやら掃除やら、今でも続けている駅がいくつかあるわ。ここらには、そういう気風が今も残っていると思うよ」と。只見線は、こんな温かな眼差しにも見守られている。



会津越川駅周辺の整備に集まった地域の人たち

只見線路線図



繋がる心 ショートムービーに願いを

これまで只見線は、“鉄道マニアが行きたい場所”として名前が挙がる路線、といった捉え方をされることが多かった。確かにそんな人々を目にすることはよくあった。そんな中、全線運転再開に当たり、あるアクションを起こした人たちがいる。それは、鉄道を愛する人に限らず、鉄道に興味が無かった人にも只見線に興味をもってもらおう！そして何より、地元の皆さんにこのスタートの輪に加わってもらい、楽しいワクワク感を感じながら開通を迎えてもらおう！と始動。地元の坂内譲さん(54)、親の実家がある金山町に移住してきた井草葉子さん(56)、やはり移住してきた桐山達郎さん(34)と仲間がどんどん集まり、『あいせき列車只見線』というショートムービーを制作した。井草さん、桐山さんは移住前に東京で数々の番組制作に携わっていた。この出会いが本物の映像を可能にした。



金山町民が総出演し制作された映画の撮影風景

メインキャストの若手俳優・福山翔大さんふくやましょうだいと小野花梨さんおのかりん以外の出演者は、町長をはじめとしてほぼ金山町民。坂内さんは「みんなが俳優さんたちと共演し踊っていくうちに、一つになってる感覚が肌で感じられたんです。見慣れたはずの風景もあらためてかけがえないなあ」と。このときめきはきっと只見線への深い愛着

につながっていく。只見線がずっとここにあって欲しい、という思いの波動が町民からあふれば、今後様々なアイデアも生まれてくるだろう。何よりも、多くの方々が、この映像を目にし、只見線に興味を感じるきっかけとなってくれたなら…切なる願いを込めたショートムービーは間もなく配信される。「この制作では、途絶えていた新潟側の人たちもすごく協力して下さったんです。その時、ああ本当に繋がるんだなあって実感しました」と井草さんは語る。

只見線を300日撮る男

「霧幻鉄道」というドキュメンタリー映画が、現在全国各地で上映されている。この映画の主人公、星賢孝さんほしけんこう(73) 抜きに只見線の再開通は語れない。郷土写真家、といっても作品の全てに只見線の列車を入れた写真を30年撮り続けている人。その写真には自然と季節感が満ちあふれ、列車と景観のハーモニーが息をのむ美しさで写しとられている。インターネットにより海外にまで広がった感動の声もまた、大きな応援の声につながった。再開通はゴールではなくスタートを切る日。星さんは益々飛び回って撮り続けることだろう。



只見川霧幻映の渡し

取材・文 渡辺 紀子/写真提供 星 賢孝

〈参考文献〉「金山町史 下巻」金山町史出版委員会/「只見町史 通史編2」只見町史編さん委員会/「奥会津・只見線 四季彩々 星賢孝写真集」歴史春秋社/「望郷一只見線」歴史春秋社



伝言板

(一社)北陸地域づくり協会が主催、共催、後援等で行う一般参加型事業です。
お時間を見つけ、ぜひお立寄りください。

イベント名	期 日	開催地・会場	内 容	問合せ先
令和元年東日本 台風から3年- ▶災害アーカイブ展	10月7日(金) ▼ 10月18日(火)	長野市役所 1階 市民交流スペース 2階 渡り廊下	水害で被災した各地区の様子、復興 支援活動の様子などを紹介	信州大学教育学部 廣内研究室 TEL:026-238-4087
▶“猪の満水” 災害デジタル アーカイブ報告会 [要申込]	10月12日(水) 10:30~12:30	・長野市芸術館 リサイタルホール ・オンライン配信	長野県・長野市・信州大学が共同で 取り組んでいる「猪の満水」災害 デジタルアーカイブ」の活動報告	
第32回 土木フェスティバル [申込不要]	10月9日(日) 9:30~16:30	長岡市 国営越後丘陵公園	建設機械の試乗体験、地震体験、 豪雨体験、土木事業のパネル展示、 模型展示 等	長岡市土木政策調整課 TEL:0258-39-2307
防災講演会 in富山市 [申込不要]	10月10日(月) 13:30~15:30	富山市 八尾コミュニティ センター	■基調講演 「土砂災害対策に関する最近の話題」(仮) 【講師】富田 陽子 氏 (国土技術政策総合研究所 土砂災害研究部長) ■活動報告 ①富山市 河川整備課 二俣 智志 氏 ②富山県防災士会 上田 司穂 氏	立山砂防女性サロンの会 TEL:090-6272-2618 (福田)
2022あいづ新米 ウォーク [要申込・有料] [定員]1,000人 定員になり次第締切	10月15日(土) 受付8:00~9:30	道の駅あいづ 湯川・会津坂下 多目的自由広場	実りの秋を迎えた会津路を歩く ①6kmコース(田園地帯を通り、 勝常寺を巡るコース) ②13kmコース(阿賀川の堤防を 通り、神指城跡を巡るコース)	福島民友新聞社 営業局事業部 TEL:024-523-1334 (平日10時~17時)
わくわくお天気・ 防災教室 [要申込・小学生対象]	11月12日(土) 14:00~15:30	燕市 信濃川河川事務所 大河津出張所	川の博士が考案した実験装置で、 洪水が起こる仕組みを学習 【講師】川のはかせ 知花 武佳 氏 (東京大学工学系研究科准教授)	実行委員会事務局 (信濃川河川事務所 計画課内) TEL:0258-32-3245
季節を彩る フラワーロード フォトコンテスト	2023年 5月31日(水) 応募締切(必着)	糸魚川市徳合地区、道の駅「能生」、関川河川 敷の3地点の撮影ポイントにおいて、「人と 花、暮らしと花、みちと花」をテーマとした作品 を募集。詳細はこちらから➡		徳合ふるさとの会 (風景街道パートナー シップ)

新型コロナウイルス感染状況にともない、実施内容を変更する場合があります。事前にお確かめの上、お出かけください。

編集後記

林口砂里さんは、人が自然と共に作りあげてきた散居村、そこから醸し出される「土徳」を守り継承したいと、アズマダチの古民家を宿にし、旅人も地域の再生に貢献してもらおう新しい旅の実証をスタートさせた。

10月1日、2011年の「新潟・福島豪雨」で最後まで不通となっていた区間がつながり只見線が全線運転再開。渡辺紀子さんは「何度でも乗りたい・訪れたいと思える路線・地域となる」という熱い想いで活動している人たちを通して沿線の魅力を発信している。

地域の個性を味わえると人気のクラフトジン。取材した(株)越後野草のジンは、上越の高原の景色と風が思い浮かぶ爽やかな味わいを醸し出す。越後丘陵公園でバラの香りのジンが飲めたらと思った。

10月11日から入国者数の上限撤廃、個人旅行の解禁などに加えて「全国旅行割」が始まる。コロナ禍で停滞していた観光の再スタートは、これまで以上に地域の価値を再認識し、それを地域で受け継ぎ、観光客とともに育んでいくかたちになるだろう。(事務局)

SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS

(一社)北陸地域づくり協会は持続可能な
開発目標(SDGs)を支援しています

地域づくり in ほくりく 第29号

発行 令和4年10月3日
編集 一般社団法人 北陸地域づくり協会
〒950-0197
新潟市江南区亀田工業団地二丁目3番4号
電話 (025) 381-1160
FAX (025) 383-1205
HP: http://www2.hokurikutei.or.jp